

ミステリ読書案内

2023. 2. 14 発行元

第447号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

内田康夫の代表作

今回は内田康夫の代表作である。「ベスト表」は第17号に、「どの順番で読むか」は第173号で既に取り上げてきた。代表作選びは思いの外難しいかもしれない。同じレベルに感じられる作品が多いから。

浅見光彦ものから何を選ぶか

最初は「浅見光彦シリーズ」から3冊とも選ぶ気になっていた。作品の数から言っても、私の印象に残っている作品を振り返っても、それが妥当のように思えたから。でも、いざ「浅見光彦シリーズ」と考えるとよけい選びにくさを感じてしまった。同じくらいのレベルと思われる作品が沢山あるから。

それで「探偵別」にしようと考え直して「信濃のコロンボ・竹村警部シリーズ」から一冊、「岡部警部シリーズ」から一冊とした。内田康夫の面白さは十分味わうことができ

る作品だから。

「浅見光彦シリーズ」の一冊は『天河伝説殺人事件』にした。「伝説」のつく本は概して出来がよい。『平家伝説』『後鳥羽伝説』『佐渡伝説』『日蓮伝説』『隠岐伝説』…。う～ん。『菊池伝説』『崇徳伝説』『赤い雲伝説』などは今ひとつかな…。

こうしてみると「歴史」に結びつく作品が多いように思うかもしれないが、日本各地に出掛けていく形が多いので、やむおうえないかもしれない。時には自然科学関連のテーマを取り上げることもあるので、内田康夫の興味が多方面に渡っていることは間違いない。

NO.3 「シーラカンス殺人事件」

1983年講談社ノベルス。『岡部警部シリーズ』の第二作に当たる。「シーラカンス」と言えば当時「生きている化石」として大きな話題になった出来事。本書は科学的な側面よりは大発見の社会的事象の角度で取り上げている。

シーラカンスを日本に連れてこようと学術探検隊が組織される。大東新聞社が資金面でのバックアップをし、一条記者を特派員として同行させた。ところが、探検隊の帰国をスクープしたのはライバル会社の中央新聞で、一条記者は曖昧な電話連絡があっただけで行方不明になってしまう。続いて探検隊の平野隊員が水族館の水槽の中で死亡しているのが発見され…。なぜこのような事件が起こるのか…。岡部の推理は。

NO.1 「天河伝説殺人事件」

1988年角川ノベルス。現在の角川文庫版では上下

二巻に分冊になっている。もちろん、名探偵浅見光彦シリーズの中の一冊。題名の『天河』は「天河神社」のことで、奈良県吉野の奥にある「天川」が物語の最終地点になっている。初版カバーには「伝奇ミステリー」の文言があったようだが、基本は能楽の水家宗家に纏わる話として作り上げられている。

プロローグでは浅見家を光彦の父親の友人・三宅が訪ねてくるところから始まる。謡曲の舞台になっている史跡を紹介する紀行文の依頼のため。そこで水上家のことが話題に上がり、宗家・和憲が引退をし、孫の和鷹か秀美のどちらかに宗家を譲るのではないかとの噂話を取り上げられる。続く第一章は話が変わり、東京の新宿の高層ビルの前で愛知県豊田市の家電メーカー所長代理の川島孝司が毒殺される場面になる。不思議なことに川島は鈴のようなものを握っていたらしい。これは後で、天河神社のお守り「五十鈴」であることが判明する。そして第二章。水上家の七回忌追善能が開催される日になり、演目『道成寺』の中で…と展開していく。伝説、芸能、歴史、トラベルものとたくさんの要素を備えた内田康夫作品の典型的なものと言えるだろう。

No.2 「信濃の国」殺人事件

1985年徳間書店。「信濃のコロンボ」と呼ばれる『竹村警部シリーズ』の中の一冊。題名のとおり長野県をテーマにした作品。最初に長野県の県歌『信濃の国』が登場する。「信濃の国は十州に…」から始まる歌詞も取り上げられている。それだけ長野県への愛着が詰まったものと言える。「あとがき」にもあるように、作者自身長野県との関りは非常に深いようである。

スタートは信濃毎朝新聞記者の中嶋英俊が編集局次長の牧田と対立する場面から。中嶋を小諸支局に転勤させる話で。ところがその夜に牧田次長は殺されたようだ。次の日の朝、長野市の南にある水内ダムに死体が浮かんでいた。中嶋は容疑者として疑われることになる。中嶋はその日に大阪から来る予定の馬淵洋子と結婚する予定になっていたのである。話変わって、第二章では中央道・恵那山トンネルの場面になる。ここでも道路脇に絞殺死体が発見される。いよいよ竹村岩男警部の出陣となる。この後、長楽寺、寝覚ノ床と連続して絞殺死体がでてくることになり、いずれも『信濃の国』の歌詞に登場する名勝の地ということになってくる。「見立て殺人」まではいかないか…??。竹村警部は長野県内を走り回ることになる。広い県内で移動が大変。